

ふれあい

平成22年 3月 第288号

大代地区コミュニティ推進協議会
(広報部)
事務局：大代地区公民館
☎364-8442

〈掲載目次〉

- 紀行・・・・・・・・・・・・・1
- ここにもあった戦後の後遺症・・・・2
- 大代の歩み(二十四)・・・・・・・・2
- ふれあい短歌(桜花特集)・・・・3
- ふれあい俳句・・・・・・・・・・3
- 大代地区公民館まつり・・・・・・3
- 春分の日・・・・・・・・・・・・・4

紀行

大代東区 三浦 徳男

私達夫婦は毎年旅行しています。いつも車での旅行で宿泊は「休暇村」の会員であることから施設を利用してあります。今回は高速料金千円を上手く利用して4泊5日の旅行。房総半島から東京アクアライン「海ほたる」を通り伊豆箱根から富士五湖を回り、山好きなので何時か一度は登って見たいと思っていた高尾山を回って、1,690kmを走った旅である。

一日目は、東北自動車道から常磐自動車道に入り、水戸の梅で有名な借楽園を見学後、犬吠埼灯台へ行った。大勢の観光客で賑わっていた。とても長く続く九十九里浜を見ながら房総半島を通り館山に着いた時は、すっかり日が落ちていた。二日目、自分の夢であった東京アクアラインを車で走ってみたいと思っていた「海ほたる」に到着。施設の大きさに驚くばかりでした。羽田空港へ着陸する飛行機を間近に見ながらコーヒータム。「海ほたる」を後にし、首都高速から東名高速へとハンドルを握る手に力がいいる。車の多さとスピードで緊張しながらも快適なドライブの時間だった。熱海の海岸でゆっくりと昼食をとり、城ヶ崎海

岸の吊り橋などを歩き南伊豆の休暇村へ。三日目、荒々しい岸壁の上に立つ石廊崎灯台へ行った。怖くて足がすくみ覗き込むことが出来ない程だった。天城峠を走り浄蓮の滝や修善寺温泉を回り箱根芦ノ湖を船で回り、それから箱根駅伝のゴール地を見ることが出来た。四日目、強羅から御殿場市を通り富士山を見ながら富士五湖を回った。白糸の滝や青木ヶ原樹海を見学し八王子市内宿泊。最終日の五日目は高尾さんへ。シーズンオフと思いきや、登山の服装している方や、軽な家族連れなど様々で、多い日はなんと七万人もの人で賑わうそうです。日本一、人が集まる高尾山と思えた。帰りは都内を避けて東北自動車道に入り帰路についた。会員で利用している「休暇村」は朝になると、従業員が散策の案内をしてくれるなど他の宿にはない温かさがあり、宿泊している人達との交流も深められ、毎回楽しい時間をすごさせてもらえます。天気に恵まれ、そしてどんな場所でも正確に案内してくれるカーナビと、いつも快適なドライブをしてくれる愛車。何よりもいつも隣に座っている家のカーナビの相棒に感謝をした楽しい旅行でした。

ここにもあった戦後の後遺症

大代南区 後藤 清一

厳しい伐採作業の数年間、苦境を生き抜いた蜂谷さんはハラシヨウラポータ(優秀作業)が認められ刑期を半減され、屋内作業、つまり理容の責任者として抜擢される。蜂谷さんは全くの未経験者であつたが、元来器用な彼は即実技をマスターする。この時期彼女と知り合ったのが白系ロシア人のクラウジャーさんで二人は結婚し三十七年の間、敗戦日本の姿そして家族の実態を知る術もなく、不安を背負つて二人の生活を送つたのであつた。

こんな生活の中である日突然、蜂谷さんから「僕には日本に妻と子どもがいる」と告白される。彼女は一瞬気も動転、しばらくは言葉にもならなかつた……。彼女は涙をこらえ「あなたは日本に帰つて奥さんと家族共々暮らすのがあなたの幸せと思う。早く日本に帰つてあげたい。日本に帰つて幸せになつて下さい」。話は決まり数日後二人揃つて日本へ……。一生の別れの旅を京都、鳥取など一週間ほどかけて回り、その後彼女は一人寂しくシベリアに帰られたそうです。こんなドラマがあつたことを団長さんから簡単に説明があつた。バスは彼女の集落

へと急ぐ。やがて彼女の住むペログレス村へ。クラウジャーさん宅へと向かう。突然の訪問でしたが運良く在宅され、お会いすることができた。彼女も俺達の訪問に非常に驚きながらも満面の笑みで肩を上げ両手を広げて「うれしすぎて血圧が上がりました」と心から喜んでくれた。意外と若く元氣な姿に皆さん安堵される。団長から花束、記念の品々を贈る。彼女の「これはどこからですか？」の問いに「日本からです」と答えると「ありがたく頂戴致します」と丁寧な謝辞があつた。俺達も各人日本の品々を贈り、尽

きぬ話に花が咲き大分時間が経ち、まだまだ話したいことがあつたが、後の予定もあるので手を振り送つていただいた。慰めの心算がかえつて辛い想いを回帰させたのではなかつたか気になり心苦しかつた。シベリアでこんな立派で美しく、強く優しい女性に会うことができ、すごく感動した一時でした。

人の不幸の上に自分の幸せがあつてはならない。という彼女の確たる信念。どれほど愛ということについて教えられたか計り知れない。凜とした中に氣品があり優しい眼差しと、意志の強い口調、彼女の信念が心に残り何時までも脳裏を離れなかつた。

今多くの人達が何時の世にも戦争はあつてはならない、戦争は破壊と悲しみだけをつくる。平和・平和と声高に叫びそれを求めながらも、それをどんどん遠ざけているとしか思えないこの頃、不況を実感するも、物が豊富になりすぎて心が貧しくなつていく心配の今の世相。今トイレの紙、手洗いの水にさえ不便な生活を強いられるシベリアの生活もあるのです。

続く

大代の歩み(二十四)

大代南区 渡邊 巖

天明三(一七八三)年は、田植えの時期になつても綿入れの着物が需要で、夏の盛りにも袷を着ていた。冷害の中で稲の稔りは悪く、稲穂は突つ立つたまま青黒く朽ちていつた。この状況に、藩は早くも七月末(旧曆)に濁酒や豆腐などの製造を禁じ、粥や雑炊を食べるように命じた。

当時、米価は通常一・八匁(一升)二〇文位だったが八月末には八〇文に高騰し、人々はまた野山に代用食を求め、食用になる草や根を争つて採取した。農作物だけでなく漁業も不振であつた。

飢饉記録にはこのありさまを

『天明三年秋、稲は稔らず、秋の末から

米価が甚だしく高騰し万民が飢える状態になった。まして翌天明四年の飢餓状態は筆舌に尽くし難く、乞食・非人が家々に群集し、食べ物求めても一粒の米を与える者も居なかつた。道路のあちこちに死人が捨ておかれ、その臓腑を犬や鳥が食い散らかすので、その悪臭が鼻を突くようであつても、人々はそれが当たり前でもあるかのように、悲しもうともしない。朝早く死体を見つけると、首・足に縄を付けて引き、または筵で巻いたりして横に背負い、川に流したり、荒地に捨てた』(現代語訳)と酸鼻を極め、大代村については『人頭戸数二六戸、死亡者数(天明四年四八八・天明八年二九八)』と記録されている。

大代村の犠牲者が多かつたのは、この村が漁村の性格も持ち、船着場があつて船客や水夫相手の商売の為に耕地を持たない者や持高の低い農民が多く、自家生産が出来ない為に凶作年には他より大きな打撃を受けたものと思われる。なおこの年には浅間山の大噴火があり、その噴煙による日光遮断の低温冷害もその一因といわれる。

一文二五〇円(現通貨換算) 続く

ふれあい短歌(桜花特集)

大代西区 藤田 遊子

国難を救ひて散りし山桜

靖国神社に神と崇めり

蕾なる桜の花も美しき

会津に忠義の魂と散りけり

徳川の家名遺せし和宮

誉れは崇く皇居に花咲く

凡庸の武士に嫁ぎて半世紀

花と咲かせし千代は賢妻

爛漫の桜の花を惜しみたる

美しき小町は何を嘆かむ

ふれあい俳句

大代西区 松浦 富男

ゆきずりの子の腫が笑うマスクかな

寒の水五臓六腑につらぬけり

思はざる終の住拠や冬日向

節分会 恵方に向かつて 恵方巻

春炬燵 女三人 姦しき

笠神西区 本郷 勝子

底冷えの群青世界 雪女郎

雪の峯 光ひしめき虹の色

薄氷の 硫黄深く 綺羅きらと

もっこりと 希望わくわく 露の臺

限りなきブルーの天空 春うらら

八 幡 森 季子

木枯しのハタと杜絶えて 通夜の黙
しやくなげの 葉は下向きに 雪催
冬ざれや 埠頭にヒトデ骸にて
粉雪の うねる地表や 立往生
路地裏に 子等の足音 日脚伸ぶ

大代地区公民館まつり

作品展示の部

日時 3月13日(土) 午後1時~午後5時
14日(日) 午前9時~午後3時

展示団体(展示場所: 体育室・2階会議室)

- ・山茶花大学・ペン習字教室・バッチワークサークル・創美会
- ・大代水墨画サークル・大代ペン習字サークル・華道サークル
- ・むかしあそび愛好会・切り絵サークル・八光書道サークル
- ・パンアートフジ大代教室

舞台発表の部(発表場所: 体育室)

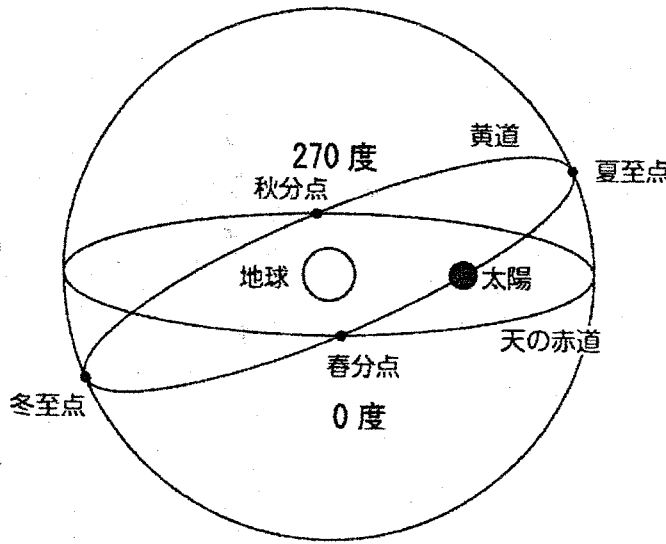
日時 3月14日(日) 午前10時~午後1時(予定)

発表団体

- ・大代剣道教室・サークル「ゆり」・社交ダンス花夢花夢Ⅰ・Ⅱ
- ・湧気会・サークルはなみずき・樹峰会大代教室・アカシア会
- ・暁流仙台南支部・吉乃会吉乃舞紫都・あじさい・カトレア
- ・大代南婦人会カラオケ部会・靖善会カラオケサークル「かしわ」

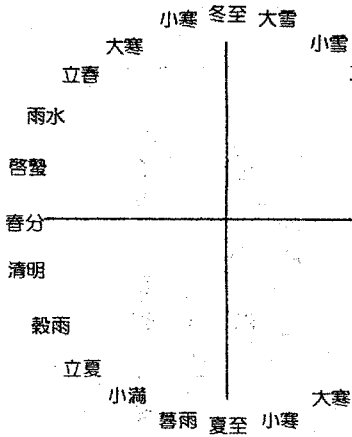
春分の日 大代北区 加藤 渉

彼岸、期間は、一週間、中日を挟んで前後三日、今年の春分の日は三月二十一日で十八日を入り二十四日を明けと呼んでいる。お彼岸、正式には彼岸会（ひがんえ）だそうでお彼岸という言葉は古代インド語の「パーラミター」を漢字で書くと「波羅蜜多」はらみた、と解説している見覚え聞き覚えの語句。三月二十一日、（春分の日）は太陽が



黄道と天の赤道との二つの交点(分点)のうち、黄道が南から北へ交わる方の点(昇交点)のこと。この点が赤経0度かつ黄経0度であり、この点を太陽が通過する瞬間が春分となる。この日はなんで休日になっているのだろう、季節の折り返し点と関連があるのかなと、調べてみると昭和二十三年「国民の祝日に関する法律」第1条、自由と平和を求めてやまない日本国民は、

美しい風習を育てつつ、よりよき社会、より豊かな生活を築きあげるために、ここに国民こぞつて祝い、感謝し、又は記念する日を定め、これを「国民の祝日」と名づける。「国民の祝日に関する法律」により、春分の日は「自然をたえ、生物をいつくしむ日」と制定してある。秋分の日、祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ。と制定してあり、他界した人との再会の証に、献花、焼香、供物を揃え、墓参という行事は、秋分の日に当てはまる。甘党の私には、春分秋分共に草餅やポタモチを供え共に供養すると明記されると、法に触れるからポタモチは必ず作れ、と云う事になる。暇だから、ポタモチを調べた。ポタモチは、牡丹餅と書く春にちなんだ食べ物、同じポタモチをオハギとも呼ぶ、こっちの方は、御萩餅で秋に食べるものでもある。また、ポタモチとオハギとの違いもコメの練り具合によっても違っても記してあった。つまり、餅に近いほう(皆殺し)をポタモチ、コメが粒状の形態を(半殺し)オハギと区別する。ポタモチの餡は、漉し餡、オハギは粒餡だそう。季節の移り変わりを知らせる曆に、二四節気があり一年を半月ごとに自然の状況を示している。



冬至と夏至、昨年の冬至は12月22日02時47分、冬至(太陽黄経270°、日出:06時47分、日没:16時32分)今年の夏至は6月22日20時28分、夏至(太陽黄経90°、日出:04時25分、日没:19時00分)冬至の日照時間約10時間、夏至に日照時間約15時間、約5時間日照時間が違う春分の日は、日出:05時44分、日没:17時53分)日照時間が12時間秋分の日は、日出:05時29分、日没:17時37分)春分と秋分は約5時間と同じ。一年を充実に生きた人の時は短く、一年を、目的もなく過した人の時は長い。定期的な井戸端会議や、お茶のみの会、この中からでも、退屈や、暇をアイデアに変え、忙しい日々に変身することもある。唯、まとまった行動をするには、会が必要になってくる。会の運営をスムーズに展開出来る仲間作りが、もっとも重要なことは、云うまでもない、口は出すが、手は出さない。理論は素晴らしいが、行動が伴わない。個人技優先の人は会をまとめるのではなく、むしろ破壊を早くする。仲間とは、自分の家族、お互い底い合って体裁が、形成されている状態が会の発展につながる。太陽は、光や熱を以って地球に様々な富と美しい折々の季節をもたらすし、衛星である月は、海の海流を定期的に動かし魚介類の成長や、海水の浄化に貢献している。地球は、あらゆる動植物に棲みかた潤いを提供している。前記のように季節ごとの恵みも、このような関連が壊れないからだ。この営みの一つでも狂うと、オハギだポタモチだと云っていらなくなる。作るは難しく、壊すは簡単。それが人的行為となると、思いを引きずってゆくことになる。半殺し、皆殺し、どころではなくなる。要留意